

Title	オペラ《ルッジェロ王》の成立史：資料研究と文脈研究の視座から
Author(s)	重川, 真紀
Citation	
Issue Date	
Text Version	none
URL	http://hdl.handle.net/11094/26231
DOI	
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

論文内容の要旨

〔 題 名 〕

オペラ《ルッジェロ王》の成立史——資料研究と文脈研究の視座から——

学位申請者 重川真紀

本論文は、ポーランドの作曲家カロル・シマノフスキ（Karol Szymanowski, 1882-1937）のオペラ《ルッジェロ王》作品 46 について、一次資料に基づく台本分析と楽曲分析を通してその成立史を再構築し、このオペラに見られる特殊性が生じた背景を明らかにしながら、シマノフスキの作品史の中でこのオペラがどのように位置づけられるのかを考察したものである。

シマノフスキが 1918 年から 1924 年にかけて作曲したオペラ《ルッジェロ王》作品 46 では、台本制作の過程で生じたさまざまな問題が、このオペラのあいまいな結末やシマノフスキの作品史における微妙な位置づけに大きく関わっていることが指摘できる。シマノフスキと台本の共同執筆者であるヤロスワフ・イヴァシュキエヴィチ（Jarosław Iwaszkiewicz, 1894-1980）の共同作業は、さまざまな段階を経てかなりの葛藤をはらんだものだった。とりわけその過程で生じたシマノフスキによる台本の改変は、オペラの結末にも大きな影を投げかけている。

以下に、本論文の各章の内容を要約する。

第一章では、シマノフスキとイヴァシュキエヴィチの台本制作過程を彼らの書簡や回想録に基づいて概観し、ワルシャワ大学附属図書館「20世紀のポーランド人作曲家アルヒーフ」所蔵のシマノフスキ、イヴァシュキエヴィチの自筆台本をもとに、それぞれの自筆稿の体裁や内容を確認しながら、それらが彼らの共同作業においてどの段階に位置づけられるのかを明らかにした。またここでは、オペラ台本の前段階として書かれたシマノフスキの「シチリア劇の草案」についても、その自筆稿の体裁をポーランド音楽出版社の図書館が所蔵するこのスケッチの写真複製をもとに示した。続いてシマノフスキ、イヴァシュキエヴィチ双方の自筆台本における詞章やト書きの追加、削除、修正を分析しながら、シマノフスキによる台本改変の実態を明らかにした。これらの考察から明らかとなったのは、このオペラの持つ不明瞭な性格が、たしかにシマノフスキによる改変によって導き出されたものであるものの、それはすでに「シチリア劇の草案」の中で予告されていたものであったということである。シマノフスキの改変には、終末へ向かって一気に突き進もうとするイヴァシュキエヴィチ版とは違い、むしろルッジェロ王の葛藤に重点を置いた心理ドラマ的な方向へと物語を運ぼうとしている様子が見て取れたが、これは当初イヴァシュキエヴィチと一致していた考えを180度転換させた結果から生じたものというよりは、もともと彼自身が終末に向かうドラマを書ききることそれ自体にあまり興味がなかったことを、台本の修正、改変の過程で認識し、作品に対する自分のビジョンを徐々に明確にしたという類のものだったことが明らかとなった。

第二章では、シマノフスキの自筆台本に最初に書かれていた「神秘劇」というタイトルをもとに、彼がイメージしていた「神秘劇」がどのようなものだったのかを、当時のヨーロッパとポーランドにおける文化的潮流に注目しながら考察した。そこから明らかとなったのは、このオペラが通常「神秘劇」という用語から想起される中世の宗教劇というよりはむしろ、当時広くヨーロッパで見られたこのジャンルのリバイバルと関わっていたということであり、ポーランドにおいてもこの文脈で新たに「神秘劇」という定義を獲得した作品が、オペラ《ルッジェロ王》の着想に影響を与えていたことである。また、シマノフスキが「オペラ」ではなく「神秘劇」に注目した背景として、彼が同時代のオペラに限界を感じ取っていたこと、またヴァーグナーやシュトラウスといったかつてのオペラ改革者に対して幻滅を感じていたことが、シマノフスキの書簡や言説から浮かび上がった。

第三章では、《ルッジェロ王》の性格を特徴づけている「中世シチリア」、「ルッジェロ王と羊飼いの対立」、「異教徒の羊飼い」という三つの要素について、それぞれの具体的な源泉となったシマノフスキ自身の実体験や読書体験をもとに考察した。東方的なものへの興味は当時の時代特色の一つであり、シマノフスキの作品に見られる東方的要

素も当時のエキゾティシズムの流れに沿うものだといえる。しかし《ルッジェロ王》において人物や舞台設定に取り込まれたビザンチンの要素は、当時の西洋音楽の流れの中で見ても特異なものだといえることができ、そこにはシマノフスキの強いこだわりが見て取れる。ここでは1911年のシマノフスキのイタリアへの旅行の詳細を振り返りながら、ポーランド人作家タデウシュ・ミチンスキの戯曲『バジリッサ・テオファヌ』、エウリピデスのギリシア悲劇『バックスの信女』、ウォルター・ペイターの短編『ドニ・ローセロワ』との比較において冒頭に挙げた三つのテーマが表象するものを明らかにした。シマノフスキは「中世シチリア」という歴史的空間を再現することに強いこだわりを見せたが、それは彼の出自や当時の社会状況から生じた「多文化が共存する場所」への希求から生じたものであり、その意味でシチリアは彼の想像が作り出した「理想郷」だったといえる。またこうしたシマノフスキの時代考証にこだわらない姿勢は、王と羊飼いの対立というこのオペラの物語にも反映されており、実在した歴史上の人物がモデルとなっているにもかかわらず、この物語がエウリピデスの『バックスの信女』を独自にアレンジしたものであること、またディオニュソスの化身として描かれる羊飼いというキャラクターが、ウォルター・ペイターの『ドニ・ローセロワ』の主人公をその下敷きにしている可能性が高いことがわかった。さらにここでは、羊飼いというキャラクターが表象するものを、シマノフスキがこのオペラの制作直前に執筆していた小説『エフェボス』を通して明らかにした。

第四章では、第三章でみたような中世シチリアの歴史空間、王と羊飼いの対立、魅惑的な羊飼いとといった主題がどのように音楽化されているのかを楽曲分析によって考察した。このオペラでは、登場人物と結びついたライトモチーフが全体に統一感を与える一方で、羊飼いや王妃ロクサーナのような登場人物自身によって歌われるライトモチーフがその聴きやすさ、わかりやすさ、またある種の「閉じた」構造を形成することによって、複雑な動機加工と凝った展開を見せるルッジェロ王よりも音楽的存在感が強調されていることが明らかとなった。こうした構造が、ルッジェロ王の内面世界を描こうとした作品でありながら、魅惑的な独唱や群舞によって物語はしばしば中断されてしまい、多彩ではあるが根底の部分にあるはずの主人公の葛藤の物語を見えにくくしている点を指摘した。

第五章では、シマノフスキの手稿譜から、このオペラの作曲がどのような手順で行われたのかを考察した。ここではまずシマノフスキの作曲過程を概観することから始め、現存する《ルッジェロ王》の手稿譜が彼の作曲過程のどの段階に当たるのかを考察し、そこからこのオペラの改変に関わっていると思われるスケッチを選び出して内容を分析した。使用した手稿譜はワルシャワ大学付属図書館「20世紀のポーランド人作曲家アルヒーフ」所蔵の資料とアメリカ議会図書館所蔵の草稿であり、ここではそれらに見られる追加や削除部分を分析したが、とくにアメリカ議会図書館所蔵の草稿からは、シマノフスキがこのオペラに割いた時間の多くは、音楽の本質に関わる部分よりも作劇上ないし音楽上の効果に関わる部分であり、このオペラに対する彼の詩的・音楽的イメージは、その手稿譜が示すように創作の初期段階でかなり出来上がっていたことが明らかとなった。

第六章では、このオペラの魅力の鍵を握るアラブ音楽的要素について、どの程度具体的な要素が見出され、それがどのような作曲技法を通じて《ルッジェロ王》の音楽に取り込まれているのかを考察した。ここでは1914年に行われたシマノフスキの北アフリカ周遊での体験をもとに、彼が現地地で接した音楽がどのようなものであったのかを同行者のステファン・シュピースの回想録で確認したうえで、このオペラの第二幕中盤にある〈羊飼いの信者たちの踊り〉に見られる旋律、リズム、音程、オーケストレーションの特性を、シマノフスキと同時期に北アフリカを訪れたパルトークによるビスクラ地方での民謡収集を参照しながら明らかにした。シマノフスキ自身はこの場面の音楽について「徹頭徹尾僕の特許だ」と断言しているが、旋律構造やリズム的特質、楽器法を細かく見ていくと、そこには抽象的な形でのアラブ音楽との類似が見られた。しかしシマノフスキがこの〈羊飼いの信者たちの踊り〉の音楽において目指したのは、ルッジェロ王の世界と対立する異教的な要素を強調することであり、彼にとって重要だったのは単に「アラブ風」であることではなく、他の部分とは明らかに異質な音楽を提示することだったことが指摘できる。また〈羊飼いの信者たちの踊り〉に見られるような作曲手法は、後の「民族主義期」の作風を予見させるものであることも指摘しておかなくてはならない。《ルッジェロ王》はシマノフスキの作曲様式における「印象主義期」と「民族主義期」に跨る作品であるが、シマノフスキの目的が特定の時代や場所ではなく彼の考える普遍的な時空間を描き出すことにあったという点において、《ルッジェロ王》と「民族主義期」の作品との間には共通する理念が見出せると同時に、ある種の連続性も見えてくれることを指摘した。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏 名 (重川真紀)		
	(職)	氏 名
論文審査担当者	主 査	大阪大学 教授 伊東 信宏
	副 査	大阪大学 教授 三谷 研爾
	副 査	大阪大学 教授 輪島 裕介
	副 査	東京外国語大学 名誉教授 関口 時正
論文審査の結果の要旨		
以下、本文別紙		

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： オペラ《ルッジェロ王》の成立史
－ 資料研究と文脈研究の視座から －

学位申請者 重川 真紀

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	伊東信宏
副査	大阪大学教授	三谷研爾
副査	大阪大学准教授	輪島裕介
副査	東京外国語大学名誉教授	関口時正

【論文内容の要旨】

本論文は、20 世紀前半の音楽史の中で独自の位置を占め、ポーランドのモダニズム作曲家として第一級の仕事を残したカロル・シマノフスキ（1882-1937 年）の代表作、オペラ《ルッジェロ王》を対象とするモノグラフである。研究は主として二つの焦点を持つ。一つは台本の創作過程に関するものであり、もう一つは作曲過程の研究である。この二点に対応して本文は二つの部分に分けられる。最初に「はじめに」で論文全体の問題設定が行われた後、第 1 部には、第 1 章「新しい舞台音楽の創出に向けて」、第 2 章「ジャンルの問題」、第 3 章「主題」の各章が、また第 2 部には第 4 章「楽曲構造」、第 5 章「作曲のスケッチ」、第 6 章「シマノフスキの音楽における『オリエント』」の各章が置かれ、最後に第 7 章「おわりに」で論文全体のまとめとされている。以下、順に概要を記す。

まず「はじめに」では、オペラ《ルッジェロ王》（1924 年完成、26 年初演）が、当時のオペラ創作の中で持っていた特異性、あるいはその結末にみられる謎が、ポーランド独立に伴う作曲者の社会的環境の変化と、それに伴って難航した制作過程に根拠を持つのではないか、という仮説が提示される。また、先行研究の整理と全体の予示も行われる。

第 1 章では、まず台本の構想について論じられる。このオペラの台本の創作過程において重要だったのは、作曲者本人による梗概（1918 年）と、彼の従弟で後に高名な文学者となるイヴァシュキエヴィチによる台本（1920 年）、さらにこれにシマノフスキ自身が手を加えたもの（1921 年）などである。論文ではそれぞれの推敲の跡に関する検討、さらには各バージョンの比較が行われ、台本制作過程について現在知り得る限りの事実が明らかにされる。

第 2 章は、このオペラを、当時のヨーロッパにおけるオペラ制作の潮流、あるいはポーランドにおける潮流に置き直し、さらに作曲者自身の言葉を通じて彼のオペラ観を洗い直す試みである。

第 3 章は、このオペラで扱われる「ビザンチン文化」「異教」「ディオニュソス」といったテーマがどのような関連の中におかれていたかを理解するために、シマノフスキ自身の愛読書であったミチンスキの戯曲『バジリッサ・テオファヌ』（1909 年）、ウォルター・ペイターの短編『ドニ・ローセロワ』

(1887年)さらにはこのオペラのモデルとして名を挙げられているエウリピデスの悲劇『バックスの信女』、そしてシマノフスキ自身の未完の小説『エフェボス』などを読み解く試みである。

第2部に入って、第4章はこのオペラ全体の音楽的な構造を分析するもの。そのライトモチーフの性格と、それらを用いて作り上げられている音楽の構造が明らかにされ、各幕が交響曲の一楽章のような大きな構造を持つ傾向がある反面、そこにブロック的な閉じたエピソードが置かれ、全体の見通しが困難になっている、と指摘される。

第5章では、作曲過程を一次資料に基づいて明らかにしている。最初にシマノフスキの一般的な作曲過程が確認された後、現在残された手稿譜がどのような性格をもちどの段階で成立したのかが検討され、さらにその中でも鍵となる草稿の内容が分析される。

第6章は、このオペラの特徴ともなっている「東方的」な音楽が、どのような発想の源泉を持つかについての多少個別的な研究である。ここではシマノフスキの「アラブ体験」、チュニジア/アルジェリアへの旅行などが具体的に検証され、同時期同地域で民俗音楽調査を行ったバルトクの論文を参考としながら、シマノフスキのオリエンタリズムがどのような背景を持つかについて論じている。

第7章では、全体を振り返った後、ワルシャワでの初演(1926年)時の反応を検討しながら、シマノフスキが、ここで描いた古代文化に、ある種の普遍性を持たせようとしていたのであり、その点で彼の創作期を貫く論理が見て取れる、という結論が導かれる。

本文はA4判144頁。加えて台本のスケッチ(原語ポーランド語を日本語訳したもの)、台本の複数の版の比較表(これも日本語訳による)、参考文献表が26頁。本文中には貴重な一次資料の複写、分析上必要となる対照表、譜例、図版などが数多く含まれる。

【論文審査の結果の要旨】

本論文に関する口頭試問は、2013年8月13日(火)に、およそ1時間30分にわたって公開審査として実施した。この研究が、先行研究を丁寧に読み込み、とりわけ多くのポーランド語一次資料、および研究文献の内容をきちんと把握し、それを越える成果を生み出したこと、またとりわけ第3章における、各「テーマ」に関する踏み込んだ検討を行ったこと、といった点で、審査員の評価は一致した。さらに作曲の過程についても、一次資料に基づいて現在できる限りのことをやった、という手応えがあり、成立史研究として今後広く外国語で発信されることを望む、という声もあった。また、巻末の台本スケッチと台本比較は、これまでポーランド語でも一般には読めなかったものだが、これが信頼性の高い日本語訳で掲載されていることは特筆に値する。

一方で、「はじめに」の問題設定と「おわりに」におけるその議論の回収の仕方については、多少無理がある、という指摘もあった。また第3章で検討された「オリエンタリズム」的テーマと第6章で論じられた「東方的」旋律について、それらをつなぐ視点があれば、現代の文化研究としてより刺激的だったのではないか、という意見も出された。学位申請者はこれらの指摘を十分理解しており、真摯に対応していた、といえる。いずれも重要な論点だが、これらは今後の課題として、学位申請者の今後の研究に期待したい。

以上のような点から見て、本論文は、日本におけるシマノフスキ研究として、またポーランド音楽研究として、これまでの水準を大きく超える成果をあげた、という点で、博士(文学)の学位にふさわしい価値を有するものと認定する。